



風車(風力発電)のある景色

A Scene with New Windmills

大 橋 隆 太 郎*

Ryuutarou Ohhashi

昨年の秋から年末にかけて放映されたTVドラマで、当代きっての“イイ男”である豊川悦司演じる主人公(タクシー運転手)が、ふとした事から事件を起こし自らが大手スーパーの社長に成り済ますと言うサスペンスドラマがあった。

毎回ドラマの最後に、巨大な風力発電の風車2基が望遠で映し出され、それをバックに主人公が車を走らせているシーンが流れる。もちろんドラマの中でも風車の回る独特の音までも効果的に使われていた。

たまたまこのドラマが始まった昨秋、本学会のエネルギー負荷準化に関するヨーロッパ調査団のメンバーとして数カ国を訪れた。初めてのコペンハーゲンで、あの有名な人魚姫の像をカメラに収めようとファインダーを覗いて驚いたのは、人魚姫の遙か向こうの対岸に聳にかかった数基の巨大な風力発電の風車が飛び込んできた事である。

私自身デンマークは今回が初めてであり、飛行機の窓からその地形を眺め、数十センチの海面上昇でどこまで海岸線が侵食するのだろうか、あらためてこの国の温暖化に対する恐怖心が実感として伝わってきた。地球温暖化防止京都会議(COP3)で先進各国が思いついた温暖化低減目標を掲げ2年が過ぎた。変化は確実に起こりつつあり、ゴールデンタイムのドラマで風力発電が効果として使われるまでになった。

日本が世界に約束した温暖化低減目標は並大抵のものではない。特に資源を持たない事情もあり原子力発電が温暖化低減に大きな意味を持つにもかかわらず、自らの事故もあり昨今のこの事に対する逆風はこれからの進路を幾分変えずには居られない状況の様に見える。

エネルギー需要に関する温暖化低減目標は2010年時点で1996年レベルに抑えることであり、エネルギー供給面の努力と相俟ってCO₂が1990年レベルまで低減で

きるとなっている。

CO₂低減に関する大雑把な試算では、それぞれの目標の効果割合は概ね下記の様になる。

省エネルギー…60%、原子力発電…30%、新エネルギーの採用…10%

この国の事情から原子力発電の受け持つ割合が大きいは先にも述べたが、問題はもしこの分が立ち行かなくなった場合である。地球温暖化問題への対応はエネルギー課題だけではないが、もし原子力発電の足らず分を、例えば省エネルギーで賄うことになればどうなるか?、新エネルギーで賄うことになればどうなるか?

試算は簡単である。

私の関連する空調機もトップランナー方式で省エネ法が改正された。全製品がこの規制値をクリアするだけでも大変な事である。他の製品の省エネ目標値も新エネルギー採用目標値も決して簡単な目標値ではない。省エネ目標値の中には国民の意識改革的なものも含まれていて、現時点で既に背伸びをしきった目標とも言えなくはない。

残念ながら今の時点、私はこの進路変更が余儀なくされた場合に対する明快な解決策を持ち合わせてはいない。日本が国際公約を果たすにはこの先、我々企業もさることながら一般国民も相当な覚悟が必要となることは必至で、私自身、まずこの覚悟ができたレベルに過ぎない。

さて、冒頭のドラマの終焉は、と言うと、心の優しい主人公だが貧しさのため愛娘を死なせてしまった過去を持つが故、他人を手にかけてまでして金持ちのもう一人の自分になろうとした。結果、もう一人の自分である大手スーパーの社長として殺される運命となる。

日本が金持ちなのか貧しいのかの議論はさておき、この主人公のような運命にはなりたくない。

風車の回る音が人の心音と非常に良く似て聞こえ、“風車のある景色”が妙にこのドラマを効果的に仕立てていた。

* ダイキン工業(株)機械技術研究所首席研究員
〒591-8511 大阪府堺市金岡町1304